

プログラム・ノート

解説=柴田 克彦

2/3

マエストロ広上のくもっと、チャイコフスキー!>

今回の「休日の午後のコンサート」は、広上淳一がおくるくもっと、チャイコフスキー!>。ロシア最大の巨匠ピョートル・イリイチ・チャイコフスキー(1840-1893)の特集です。とはいえ、交響曲でも協奏曲でもバレエ音楽でもなく、いわゆる“管弦楽曲”ばかり。どれもおなじみの作品ですが、まとめでの演奏は^{まれ}稀ゆえに、今回は貴重な機会となります。

前後半ともに、管楽器や打楽器が活躍する華麗な曲の間に、弦楽の美しい調べが挟まれた、3楽章作品のような構成。全6曲の内、バレエ『白鳥の湖』、交響曲第4番、ヴァイオリン協奏曲等の名作が続いた時期から間もない1880年に、『ロメオとジュリエット』の決定稿を含めた4曲が完成されていますので、充実期の冴えたオーケストレーションを存分に味わうことができます。

では、ますます円熟味を増してきた広上淳一と東京フィルが情熱的に奏でる、カラフルなサウンドとダイナミックでメロディアスな音楽を満喫しましょう。



広上淳一(2012年2月の公演より)

©三浦興一

2/3

聴衆も大興奮。負傷兵を慰め、 民族の士気を高めた『スラヴ行進曲』

幕開けは『スラヴ行進曲』。スラヴ民族の士気を高揚すべく書かれたコンサート・マーチです。1876年、チャイコフスキーの恩人であるモスクワ音楽院院長で指揮者&ピアニストのニコライ・ルビンシテインが、トルコとセルビアの戦い(ロシアは同じスラヴ民族として後者を支援しました)に伴う負傷兵慰問基金募集の慈善演奏会を提唱しました。チャイコフスキーはその企画のために本作を作曲。同年モスクワで初演され、聴衆も大興奮したと伝えられています。

曲は、セルビアを含む南方スラヴの旋律が複数用いられ、打楽器の効果的な活用も際立っています。「葬送行進曲風に」と記された戦争の犠牲者への挽歌に始まり、スラヴ風の主題が次々に登場。やがて帝政ロシアの国歌が出されて高潮し、スラヴ民族の勝利を謳うかのような力強いクライマックスに至ります。



ニコライ・ルビンシテイン
(1835-1881)

文豪トルストイも涙した…… 感動を呼ぶ「アンダンテ・カンタービレ」

おつぎは弦楽四重奏曲第1番より「アンダンテ・カンタービレ」。四重奏曲自体は、創作活動初期の1871年に作曲されました。しかしながらこの第2楽章は、単独の小品として高い人気を獲得。「ゆったりと歌うように」を意味する速度・発想用語がタイトルとして定着し、今回の弦楽合奏版ほか様々な形態で演奏されるようになりました。なお、1876年に演奏された際、臨席した文豪トルストイが涙を流し、チャイコフスキーをいたく感激させたとの逸話でも知られています。



文豪レフ・トルストイ
(1828-1910)

曲は、2つの部分が交互に登場する、感傷的でしみじみとした音楽。最初の旋律は、チャイコフスキーの妹の嫁ぎ先であるウクライナのカメンカ村の家で、ペチカを作る職人が歌っていた民謡に拠るといわれています。

激動の後にチャイコフスキーが生んだ 明朗で躍動的な作品『イタリア奇想曲』

前半最後は『イタリア奇想曲』。チャイコフスキーは、1875～78年に、前記の諸作やピアノ協奏曲第1番、歌劇『エフゲニー・オネーギン』などの傑作を続けて生み出しました。またこの時期は、教え子との急な結婚と破局、モスクワ河への入水、鉄道王の未亡人メック夫人からの年金開始、それに伴うモスクワ音楽院辞職などが続いた激動期でもありました。本作はその後間もない1880年の作。なお同年には『弦楽セレナード』、大序曲『1812年』も書かれています。

1878年にモスクワ音楽院の教師を辞して自由な時間ができたチャイコフスキーは、各地へ旅行するようになり、1879年末には弟モデストと共にパリやローマを訪れました。『イタリア奇想曲』は、その際に受けた陽光輝くイタリアの印象を音で描いた作品。翌年ロシアに戻って完成し、モスクワで初演されました。

曲は、チャイコフスキーには稀なほど明るく躍動的な音楽。全体に管楽器の活躍が目立っています。ローマのホテル前庭の騎兵隊兵舎から聞こえていたというファンファーレに始まり、色彩感溢れる5つの部分がメドレー風に登場。オーボエで出されるイタリア民謡『美しい娘』や、民族舞曲タランテラのリズムなどを交えながら華麗に進行し、高らかに終結します。



陽光をあびるローマの遺跡

若い男女の悲恋を描いた幻想序曲『ロメオとジュリエット』

後半最初は幻想序曲『ロメオとジュリエット』。ペテルブルグ音楽院を卒業して4年後の1869年に書かれた、彼の有名曲の中では最初期の作品です。ロシア国民楽派「5人組」のリーダー格で友人のバラキレフの勧めによって作曲し、1870年モスクワで初演されました。しかし初演直後と1880年に大きく改訂されており、現在耳にするのは、習熟の技法が反映された、初稿とはかなり違う音楽です。



ミレイ・バラキレフ
(1837-1910)

題材はもちろん、長年対立するモンタギュー家とキャピュレット家の男女＝ロメオとジュリエットの悲恋を描いた、シェイクスピアの代表的悲劇。ただし物語自体の描写ではなく、劇的なイメージを音にした“幻想”序曲です。2人の相談役となる慈悲深い修道僧ロレンスを表した荘重な序奏で開始。テンポを速めた主部に入ると、両家の対立を表わす激しい部分、ロメオとジュリエットの愛を表わす優美な部分が続きます。やがて各主題が交錯しながら劇的に展開。最後は純愛の果ての死を表す清らかな音楽となり、力強く終結します。

モーツァルトへの想いが結実した『弦楽セレナード』

代わって『弦楽セレナード』より第1楽章。この曲は、「モーツァルトへの愛情による内面的な衝動」(手紙より)によって1880年に作曲され、1881年ペテルブルグで初演された、ロマン派セレナードの代表作です。具体的には『アイネ・クライネ・ナハトムジーク』に根ざしており、「内面的な衝動」は、同時期に作曲していた派手なイベント曲『1812年』の反動ともいわれています。曲は、西欧的洗練味とロシア情緒が渾然一体となった豊麗な音楽。全4楽章がそれぞれ単独でも演奏されています。

第1楽章「ソナティナ形式の小品」(アンダンテ・ノン・トロppo-アレグロ・モデラート)は、ソナティナ=小さなソナタ形式で書かれた楽章。冒頭部はかつ

てCMで頻繁に流れていました。短調の荘重な序奏で開始。長調の主部は流麗な第1主題と軽やかな第2主題を軸に進み、最後に序奏が再現されます。

ナポレオン戦争の転換点、 1812年のロシア戦役を描いた大序曲

締めくくりは大序曲『1812年』。1880年、翌年モスクワで開かれる産業・芸術博覧会(同年には開催されず)のために、ニコライ・ルビンシテインの依頼で作曲された、『スラウ行進曲』と同様の経緯をもつ作品です。1812年に大軍を率いてモスクワに攻め入ったフランス・ナポレオン軍は、寒さと飢えと



フランス皇帝ナポレオン1世
(ダヴィッド『ベルナール峠から
アルプスを越えるボナパルト』)

ロシア軍の反撃により、決定的な敗北を喫しました。本作はこの歴史的な出来事を描いたもの。初演は、1882年8月、破壊から再建されたモスクワ中央大寺院前の広場で行われ、本物の大砲が撃たれたといわれています(真偽不明)。

曲は、帝政ロシア時代の聖歌でゆっくりと始まり、やがてフランス国歌『ラ・マルセイエーズ』が登場してフランス軍の侵攻が描写されます。ロシア民謡の部分を挟んで、激しい戦闘が展開。次第にロシアの旋律が優勢となり、帝政ロシアの国歌が高らかに奏され、鐘や大砲(通常は大太鼓で代用)が轟く壮麗なクライマックスを迎えます。



ナポレオン軍を脅かした冬のモスクワ川

しばた・かつひこ(音楽ライター)／音楽マネジメント勤務を経て、フリーランスの音楽ライター、評論家、編集者となる。雑誌、公演プログラム、宣伝媒体、CDブックレット等への寄稿、プログラム等の編集業務のほか、一般向けの講演や講座も行うなど、幅広く活動中。著書に「山本直純と小澤征爾」(朝日新書)。